

3年目を迎えた「英語ワークショップ」

太田 洋*, 井戸 桂子*, 杉長ジャッキー*

The 2012 “English Workshop Class” Progress Report

Hiroshi OTA*, Keiko IDO*, Jackie SUGINAGA*

Abstract

This paper reports on the progress of the 1st and 2nd year students in the English Workshop class, from last year to the present. It also provides some insight into the activities that shape this class. To begin, a general overview will be given about what kind of class the English Workshop is, and what progress has taken place over the past two semesters.

The next section will discuss some new developments that have been successfully implemented in the form of conversation strategies and, in particular, the utilization of a new social network system called Edmodo. This is a special website, like Facebook for students, introduced not only as a way for students to further engage with new language but also to foster collaborative and autonomous learning both in and outside the classroom.

Finally, there is a special report on two one-to-one interviews with students who had previously taken the English Workshop for two consecutive years, revealing how they spent their time at the Workshop, what they learned, and to what extent was it a valuable experience.

1. はじめに
2. 「英語ワークショップ」の概要
3. 平成23年度後期 24年度前期 授業の報告と新しい試み（授業内）
4. 平成24年度 授業外での新しい試み
5. 2年間履修した学生へのインタビューによる検証

1. はじめに

「英語ワークショップ」は、平成22年度に、少人数制の選択科目として開講された。個別指導 (tutorial) を受けて自分にあった学習法を

習得する授業であるが、「自主自立を促すための面倒見ある教育」を実践する本学に於いてその一例として注視されている。本年度で3年目を迎え、人文学部国際文化学科の1・2年生を

*人文学部 国際文化学科

対象としているので、初年度から学んだ学生は3年生となり、いわば本科目の卒業生・履修終了者として3年生の勉強を続けている。

この授業を開始して以来、授業内容の紹介と検証を、「新科目『英語ワークショップ』の試み」(『駒沢女子大学研究紀要』第17号)、ならびに「『英語ワークショップ』の展開」(『駒沢女子大学研究紀要』第18号)に於いて発表している。3年目の報告となる本稿では、「英語ワークショップ」の概要を述べた後、平成24年度の現状、さらに、授業内外で実施した新しい試みとその成果を明らかにする。そして最後に、前述の履修終了者へのインタビューを通じて、学生の自学への到達を検証する。

2. 「英語ワークショップ」の概要

本授業「英語ワークショップ」は、多様化している学生の英語力にいかに応じていくかという問題を解決するために平成22年度に設けられ、全体指導に加え、個別指導にも重点を置くものである。教員が学生と1対1のtutorialを行い、各学生の英語レベルとニーズに合わせた学習を進めることを目的としている。そのため、日本人教員とネイティブ教員が、少数の学生を指導する。教材は、本学の自前教材シリーズの一つとして「講義ノート」を作成し(以下、テキストと呼ぶ)、毎年改訂版を発行している。

具体的な学習方法は、1) ネイティブ教員と会話をする、2) 自分のことを英語で表現する、3) 興味のあるものを多読する、4) 日記を書く、5) 興味のあるものについてリスニングをするなど、多岐にわたる。こうした英語学習方法の中から、学生は日本人教員からtutorialを受け、自分にあったものを選び、大学での授業中および自宅において継続的にほぼ毎日学習を行うのである。

大学授業内でのコアとなる活動は、1) ネイ

ティブ教員と学生3~4名で会話をし、それをICレコーダーに録音して、各自が振り返りをする、ことに会話中のuseful expressions(役に立つ表現)を後述のLearning Diaryに記録する、2) テキスト内にある毎週の振り返りシートを見せながら、日本人教員からtutorialを受ける、の2項目を基本として、3) warming upのpair workを行う、4) 必要に応じて全体指導を受ける、5) 残りの時間は自分に合った独立した学習(自学)を行うといった構成である。

学生は自分個人の学習の記録として、Learning Diaryを必携する。授業外学習としてこのLearning Diaryには日記はもちろんのこと、会話振り返りや英語の映画鑑賞など、自分の行ったすべての学習を、毎週の目標とともに記すこととした。

本授業の開講年次と履修者数について述べる。年次は2年間で、履修人数は原則として日本人教員一人につき学生8名とした。

まず1年次では国際文化学科1年生全体を対象とし、「英語ワークショップⅠ」(前期)「英語ワークショップⅡ」(後期)という科目名の下、学期ごとに履修者16名を募る。4月の第1回説明会には例年多くの学生が来場するので、この科目の意義と学習方法、さらに学生のモチベーションが必要であることを述べ、それを納得した学生のみが履修する。人数が定数を超える場合は抽選となる。後期の「英語ワークショップⅡ」は新規履修希望者が退出者より多い時のみ全体での抽選となるが、ほぼ同じ人数なので抽選を必要としないことが多い。

2年次は国際文化学科の3つのコースのうち英語コミュニケーションコースの学生のみを対象とし、「英語ワークショップⅢ」(前期)「英語ワークショップⅣ」(後期)の科目名の下、学期ごとに原則8名を募る。

3. 平成23年度後期 24年度前期 授業の報告と新しい試み（授業内）

平成23年度後期と平成24年度前期と後期前半の授業報告を行う。テキストを改版し、さらに教員自身の指導が円滑になったこともあり、この期間、学生は自分のペースを見ながら概して落ち着いて学んでいたと言えよう。

まず平成23年度後期の「英語ワークショップⅡ」はモチベーションの高い1年生が引き続き履修していたので、ネイティブ教員との少人数英会話では活気がみられ、Learning Diaryの書き方も色分けするなど各自工夫が見られた。多読の進度にはかなりの差がみられ、多く読み進んだ学生は10万語に到達した。教員は努力している学生のLearning Diaryや「多読記録欄」に様々な種類のシールを与えているが、それも励みになり10万語に達したという学生の声も届いた。

平成23年度後期の「英語ワークショップⅣ」では、6名が海外留学となった後なので、人数は減ったものの、それでも残る6名と新規履修者1名合計7名が熱心に履修を続けた。中には1年次前期から履修し続け4学期目となる学生が2名いて、自分のペースを見つけて、着実に学習していた。前期には留学予定者を前に学習への焦りを感じたときもあったようだが、教員と話しているうちに自分は自分の好きなことを伸ばしていくとよいという考えに到り、工夫を重ねながら淡々と学んでいた。こうした姿も自学を習得し始めている証である。

この「英語ワークショップⅣ」では、7名という少人数を生かして、新しい試みを二つ行った。すなわち、1)スピーチと第3者による紹介(tell and retell)と2)ディベートである。1)では、ある演題(第1回は「夏休みの体験」、第2回は「将来の夢」)をスピーチした後、別

の学生がその人の体験や夢をもう一度語るのがある。ここで二人の間にあらかじめの相談はなく、その場で聞いたことをすぐにまとめて語り直すという力が要求される。2)では、テーマ(第1回は、「英語学習のために留学するのに、ロンドンとニューヨークとどちらがよいか?」第2回は北海道と沖縄と夏の旅行にどちらがよいか)を決めてグループ内で作戦を練ったあと、実際に黒板の前で発表と討論を行った。討論終了後、教員が理由も述べてジャッジをした。教員は意見応酬に役立つ表現(たとえば、It may be true, however～～. That's a good point, but～～. I totally disagree, because～～ etc)を予め教え、学生たちは自分の意見を述べやすくした。

もちろん、このスピーチ(tell and retell)やディベートにおいても、Learning DiaryとICレコーダーは欠かせない。すなわち発言を録音し、振り返りを行い、ネイティブ教員に直された「役に立つ表現」をLearning Diaryに書き留める。さらに、この表現を日記の中で書いたり、次回のグループ会話でもう一度使ったりするのである。こうして学生たちは、スピーチ(tell and retell)やディベートでの表現や語彙が日常でも使えるようになることを心掛けることになる。これが「英語ワークショップ」の特徴でもある、「振り返り」そして次に使うという学習になる。スピーチやディベートといった、少人数ならではの時間をかけた試みができたので、学生たちも「平素の会話とは異なった緊張感を味わえた。個人的な生活を述べるだけでない、さまざまな表現や語彙が学べた」と言って満足していた。ゲームのような楽しさがあると述べた学生もいた。

平成24年度前期の1年生対象の「英語ワークショップⅠ」は、抽選の上、履修者を16名とし

たのは例年通りであるが、学生の態度が前年度に比べて控えめであったので、教員はクラス活性化の指導にも努めた。反応が遅いときは、どんどん発言するように仕向けたり、warming up としてペアで口頭による Q&A が2分間で何通りできたかを競わせたりした。するとその後のグループ会話は以前よりスムーズに動くものとなった。

他方で tutorial をすると、全体のときとは違って自分の英語への思いを静かにしかし熱心に語る学生が多かったのも、このクラスの特徴であった。教員はこのチャンスを捉えて学生に目的にかなった学習を指導した。tutorial というシステムの長所が生かされる場面でもあった。学期末恒例の授業アンケートの自由記述欄には、「この授業を受けて、英語だけでなく勉強全体への意識が変わった。」というものもあり、自学を習得し始めてくれたと同時に、1科目がそうならば、他の科目にも波及するという好例を見ることができた。

もちろん、3年目となった「英語ワークショップⅠ」でも、コアとなる活動（ネイティブ教員との会話・tutorial と振り返り・多読・日記）も、対面会話の録画（学期の初めと終わりにネイティブ教員と行う二人の会話を録画し、その伸びを学生本人が振り返るとともに確認するという活動）も、語彙サイズテストと毎回の自分用の単語テストも、着実に実施された。さらに新しい試みとしては、Edmodo により useful expressions を交換しあうという授業外の学びがあるが、次章で詳述する。

平成24年度前期の2年生対象の「英語ワークショップⅢ」は、履修希望者が16名と定員の8名を大幅に上回ったが、学生内での話し合いの結果、全員で履修することになった。活動自体は Edmodo を含め、既述した1年生のものとは変わらなかったが、経験者もいたのですが2

年生らしく自分のペースでこなしていた。またディベートも試みた。テーマはいくつか教員が提示し、その中から好きなものを選んで4名チームが相談しながら行った。もちろん IC レコーダーでの録音と Learning Diary での振り返りは変わらない。ただし人数が多いとディベート自体は楽しめたが、その後のコアとなる授業を行うときなど時間が足りなくなることがあり、全体としてあわただしい印象は避けられなかった。

なお、平成24年度後期の「英語ワークショップⅣ」では、海外留学へ出かけた学生もいて、9名の履修者で行っており順調である。ディベートの他、社会的問題に対するスピーチとフロアの意見交換という、1つ段階が上がった試みも始めている。これについては、次回に報告したい。

平成24年度からの新しい試みで最も大きなものは、授業外で行われた Edmodo の活用である。担当のネイティブ教員から報告する。

4. 平成24年度 授業外での新しい試み

Using a Social Network System to Facilitate Learning

Today, teachers play a significant role in encouraging students to take responsibility for their own language learning, by introducing learning strategies, facilitating reflection, critical thinking and creating opportunities where they can get involved in learning beyond the classroom. Technology is one tool that can help students recycle, share and build on what they learn in the classroom. A secure and user-friendly way of facilitating this is through a social network system (SNS) called Edmodo. Basically, Edmodo is like a purpose

built Facebook for students and teachers and serves as collaborative platform to share information and communicate through messages, comments, and homework assignments.

At the English Workshop, in semester one, Edmodo was introduced to both the first and second year Workshop classes. Some of the benefits of using this free SNS will be given below, followed by a brief discussion of some possible ways to expand on how this could be used at the English Workshop in the new academic year, 2013.

Apart from the fact that Edmodo can be used as means to reinforce and recycle learning, students can also check their messages on it using a PC or by using their smartphone anytime, anywhere. Teachers are able to give assignments, ask questions, assign grades and do mini-surveys using the software built into Edmodo. Photos and videos can be uploaded to the site. Additionally, if a student has posted something the teacher is notified via email and can respond soon after it is posted. Providing immediate and specific feedback to students, in class and out, is an essential element of learning a language.

At the Workshop, the students record all group conversations with each other on a voice recorder. Then afterwards they listen to the conversation and write up some useful expressions that they heard during the conversation. This not only helps students notice and understand what they have learned, but it can also help to develop writing and communication skills. Once students have posted their useful phrases and messages this

becomes available for the whole class to see. By sharing this information students can not only review what they studied within their own group, but also discover and learn what other groups have discussed. Corrections are given, where necessary, on grammar or language that has been misheard/misspelled. Furthermore, students are encouraged to read and comment on each other's postings. To follow is an example of an extract from Edmodo for the English Workshop for 1st year students. The students' names have been removed for privacy protection.

STUDENT A to Workshop 1st Year

Hi! Jackie and everyone.

How are you ~ ?

[These] There are my useful phrases.

1. I'm starving.
2. I'm surprised.
3. What is that ?
4. Did you have tried it ?
5. What else ~ ?
6. How often do you ~ ?

Thank you for reading.

I'm looking forward to talking with everyone on Thursday.

STUDENT B- to Workshop 1st Year

Hi !! I want to use your phrases because it's useful !!

See you tomorrow !!!!!!!!!!!!!

JACKIE SENSEI

Hi (STUDENT A),

Thanks, these phrases are great!

For No. 4 you can say —

‘Did you try it?’ or you can say ‘Have you tried it?’

Look forward to seeing you on Thursday!

Considering all the merits and the potential uses of Edmodo, we would like to continue to use and explore other possibilities for further use. For example, to encourage extensive (as well as intensive) reading, as an extra curricular assignment students could do book reviews in the form of written or oral voice recordings. Some other potential uses could be to add some recordings given by native teachers as a dictation tool where students could listen to and write out the conversation and subsequently compare it to the original conversation. Additionally, focusing on pragmatic uses of English in certain situations, as well as the natural pronunciation of English could be especially advantageous for students who want to study abroad or use English in authentic situations. Of course, Edmodo is not a replacement for other methods of learning, but it is certainly a powerful tool that can strengthen both the collaborative and autonomous side of learning beyond the classroom.

5. 2年間履修した学生へのインタビューによる検証

2年間履修した学生（平成24年度は3年生）へのインタビューから効果を考えたい。

「英語ワークショップ」の効果を考えるために、今年度は1、2年次すべてのワークショップを履修した2名の学生にインタビューを行った。

2名は英語コミュニケーションコースの学生で、1年次2月に2週間の海外研修に参加した以外は大学内で学んだ学生である。（以下学生A、学生Bとする。）

次の質問で半構造化インタビューを行った。質問1、2は当時のことを、質問3、4は現在のことを尋ねている。

- 1 英語ワークショップを2年間履修して何を学びましたか？
- 2 英語学習や学習方法などで変わったと思う点は何ですか？
- 3 今、英語学習は何をしていますか？
- 4 ワークショップで学んだことで役立っていることはありますか？

【質問1、2への回答から】

成果として2点挙げられる。一つは、「使うことを意識」するようになったことである。授業では必ずネイティブと話す時間がある。この実際に英語を使う時間を意識して、ただ文法書を勉強するのではなく、話すために必要なので文法書を学ぶようになったと学生Aは語っていた。また家庭学習での課題の日記について、「毎日、英語で日記をつけることで、以前より英語で日々の出来事をどう表現するか意識するようになりました」と学生Bも語っていた。

もう一つは学習方法を「工夫する」ようになったことである。学生Aは、「英語学習が習慣化した。たとえば、通学時間の利用、寝る前の1時間の学習など、慣れもあるが、リズム感を以って勉強できるようになった。『英語ワークショップ』で学んで以来の毎日の積み重ねの延長を実感している」と述べた。学生Aは「工夫するのが楽しかった」とさえ述べている。

学生Bは自分の目的に合わせて自分のやり方で自分のペースで勉強することを学んだと述べている。そして毎週授業中で行う振り返りで

また学習法を工夫するようになり、その結果「毎日は無理だと思った日記が習慣となった」と述べた。また学生Bは気になる単語、わからなかったが単語を Learning Diary の単語帳（自分で記述する場所を決めた単語コーナー）に書き、それを日記やネイティブとの会話に使うことを考えた。そしてその単語が増えていくのが楽しかったと述べている。

いずれも「させられる学習」から「する学習」へ変化したことがわかる。また自分で学習法を工夫し、振り返り、改善するという「メタ認知」の力をつけていたことがわかる。

【質問3、4への回答から】

現在学生A、BはTOEIC対策の勉強をしている。学生Aは「みっちり勉強すると嫌になってしまうタイプなので、通学時間や寝る前に（1時間から30分）…という感じでやっています」と述べ、「英語ワークショップ」で身についた習慣を継続させていることがわかる。

また学生BはTOEIC以外に、英語教員の研究室にある時事英語を扱った学習用英字新聞を読んでいる。これも「英語ワークショップ」で身についた学習習慣を継続している。またインターネットを使い英語のラジオを聴いていると述べていた。

2人に共通していることは、「英語ワークショップ」で身につけたことを生かしていることである。この科目は「自律した学習者を育てる」ことであり、ある程度その目標は達成できていると考えられる。

最後に自分の学習法を身につけるために教師が果たした役割について学生Aは以下のように述べている。

一人ひとりのレベルの差があるのは、刺激になってとてもよかった。自分は留学をしな

いので、頑張っている同級生を見て、「偉いなあ」と思う一方、「このままでは、やばい。もどかしい。悔しい」と思った。スランプに陥ったし、やらなきゃという焦りもあったが、例えば「気になる文章を一行書き写すだけでも良いのよ、続けてみて」という先生のアドバイスにより、「取り敢えず何かしよう、続けて行こう」と気を取り直して、転換できた。そして、自分の好きな書きことを続ける、という学びを発見した。

自律した学習者を育てるための facilitator としての教師の役割の大切さを改めて感じる学生の一言である。